

半端ないって、会場全体に響き渡る大声量、オペラの発声法で真っ向勝負。病院ロビーにおけるコンサート、前方の席に位置する、頭の上でパフォーマンス。パワフルな歌唱のみならず、千変万化豊かな表情、情緒たっぷり身振りアクションで、日本の歌からビゼー・カルメンのハバネラまで。特に「かごかき」で三面六臂、音楽家ザ・レジェンド、大阪のご当地ソングを、人足コトバでコレデモカコレデモカ、強烈な身振り手振り、ノリノリのショーマンシップ。許容のボーダーラインすれすれ、抵抗伴わね圧迫感、心地よいツンザキとともに受け容れ。

合い間のしゃべくりトーク、いつもはピアニストのお膝元、面目発揮の領分なれど。ベンゼン核より蛍雪の力か、こちらもゲストの独壇場、エネルギッシュなヴァイタリティー、聴衆みんなを引き込み魅了する。ピアノも状況を理解、饒舌の前に寡黙を決め込む、ニコニコ伴奏に終始。最初のピアノソロ、場の迫力に印象が消失、コメントなし。(2018.7.9)

ヨハン・シュトラウスⅡ：オペレッタ「こうもり」より序曲

滝廉太郎：荒城の月

本居長世－岩河智子：七つの子

貴志康一：かごかき

日本の四季メロディー

ビゼー：歌劇「カルメン」より「ハバネラ」

(アンコール)

下総皖一：七夕さま>

【メゾソプラノ】串田淑子